



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サハリンにおける前オホーツク文化の諸問題
Author(s)	ワシリエフスキー, A. A.; 井上, 紘一; 福田, 知子
Description	井上紘一・福田知子訳
Relation	オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 1-18
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38395
Type	departmental bulletin paper
File Information	no1_p1-18.pdf



サハリンにおける前オホーツク文化の諸問題

A. A. ワシリエフスキー (井上紘一・福田知子訳)

Problems on the Pre-Okhotsk Culture in Sakhalin

VASILEVSKI Alexander

The sites of Yuzhnaya 2, Kedrinka, Baklan and Pavlovka, very similar to each other, were discovered in 1985-1989 in southeast of Sakhalin. The Aniwa culture, dated back by ^{14}C to 2,710-2,250 BP was distinguished. Supposedly, its calendar (calibrated) age should be about 500-300 BC.

A complex of this culture is characterized by such features as:

- a concentrated structure of the settlements at maritime sites;
- subterranean type of pit dwellings of oval shape;
- earth walls of houses coated with white clay;
- fireplaces with circles of stones;
- flat bottom vessels decorated by the typical Jomon pattern (oblique rope impressions), apertures on the rim, and horizontal string impressions (Aniwa type);
- stone industry based on the utilization of obsidian as a main raw material for tool manufacturing;
- stemmed knives and trapezoid scrapers, one angle pointed.

By the complex of these features the Aniwa culture is very close to the Hokkaido cultures of Epi Jomon, and this makes us think it to be the most northern branch. The appearance of the Epi Jomon in Sakhalin is the archaeological reflection of the movement of the Paleo-Ainu tribes to the North. Aniwa type pottery is different from that Epi Jomon pottery which was found in the southwest and in the middle south of Sakhalin island.

The problems of the origin of Susuya pottery and of the connections between Susuya and the Epi Jomon people came into existence since the Susuya type pottery was distinguished by Professor Ito Nobuo. In the 1930s and also in the 1980s and 90s some sites of Epi Jomon origin were discovered. The author proves Susuya to be a separate archaeological culture which played a role of the cultural fundament of the Okhotsk cultures, appearing in the 1st millennium AD. The Aniwa culture was distinguished as a variant of the Epi Jomon on the basis of new information in the 1980s and 90s.

It is supposed that during that period different cultural groups of Epi Jomon societies were penetrating Sakhalin from the south and settled there. According to the calibrated radiocarbon dates, the peak of migration was about 5th to 2nd centuries BC. We noticed that the complexes of Susuya and Epi Jomon are situated in the same archaeological layers. It is supposed that within the early Susuya time (5th to 2nd centuries BC) these two cultures coexisted in southern Sakhalin. North Sakhalin culture population (Nabil' type) was neighbor to the latter, seeing very similar to the culture of Susuya.

鈴谷期前期（紀元前6－2世紀）の南サハリンにおける鈴谷文化と続縄文グループの文化の関係について検討する。この問題はこれまでも研究され、オホーツク文化の問題とも直接関連がある。調査はサハリンと日本を舞台に双方の経験を土台にして行われた。これらの地域では続縄文化と鈴谷文化が接触し、長期に互って共存していた。

1 研究史と問題提起

ロシア極東と日本における考古学的研究は19世紀後半に始まった。

「オホーツク海沿岸文化」という考えは、1927年清野謙次が提唱した。1933年には河野広道がこれを支持した（種市1979）。河野は「樺太式縄目土器」、「樺太式型紋土器」（型押文）、「オホーツク式刻紋土器」（舟窩状刻文）、「ソーメン土器」（貼付文）をあわせて、この文化に含めた。樺太の土器を縄文土器の一つの型として分類する根拠は、縄文と馬蹄形圧痕の文様が、東北地方から出土する土器と似通っていることである（河野1933a）。その後、河野はこれら4つの型を、「オホーツク文化」（以降OC

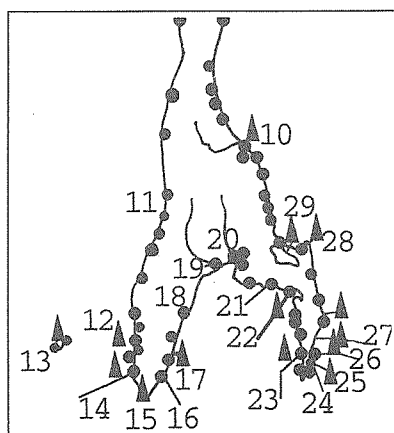


図2 サハリン南部における
鈴谷文化（●）と続縄文文化
（▲）の遺跡

と略す）の土器と名づけた（河野1933b）。

河野広道、伊東信雄、その他の研究者は、最初からこの現象の複合的性格を理解していたに違いない。それは、各地における土器の型式編年図（伊東1942）や、型式分布図（大場1955）の作成が直ちに始まったからである。ソ連の考古学者もOCを細分化しはじめた。「独立性の強い文化」（Kozyreva 1967）として、あるいは文化段階や地域（Vasil'evski 1973, Vasil'evski &

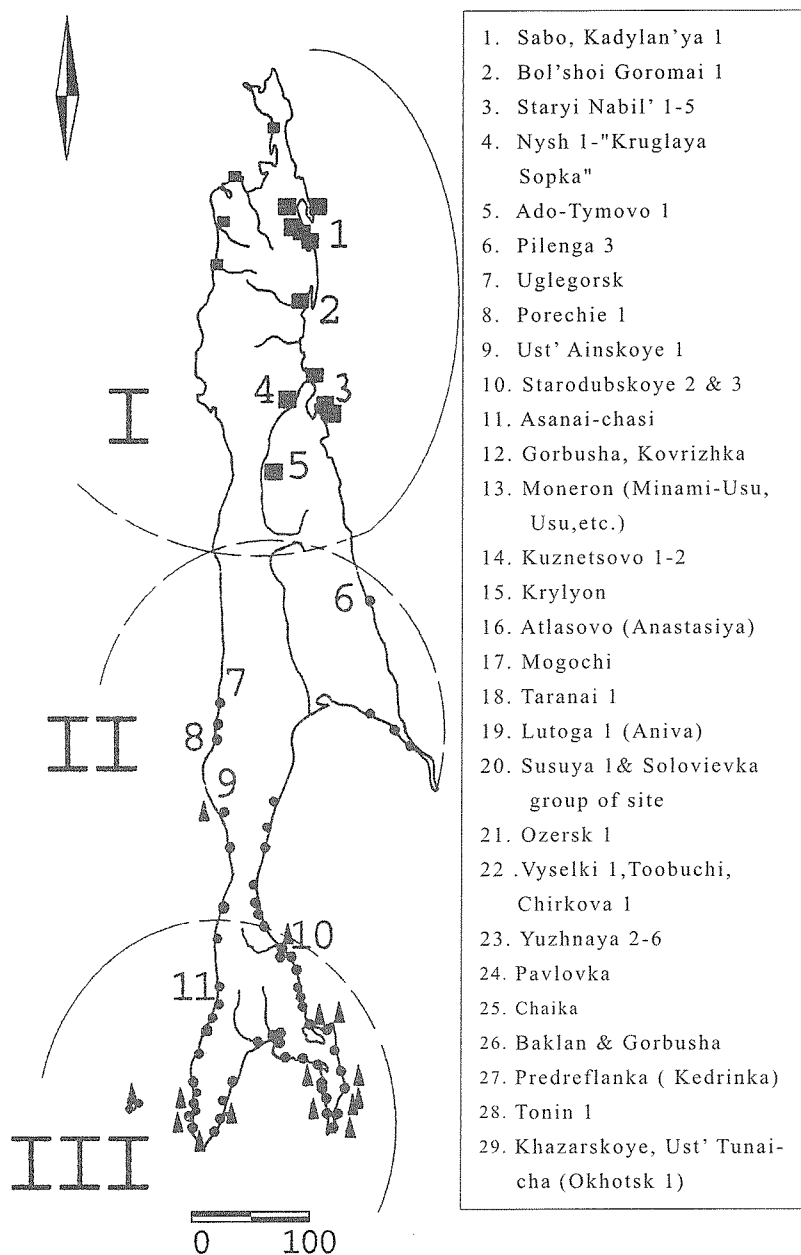


図1 サハリンにおける鈴谷期の遺跡分布ならびに北サハリン文化の分布限界
（I：北サハリン文化，II：鈴谷文化，III：続縄文文化）

Golubev 1976) を細分したり、さらには OC の地方型 (Shubin 1977) までもが設定された。

今日、我々にとってオホーツク文化とは、時間的・空間的に長期にわたって併存してきた近隣地域の一連の考古学的文化を指す。オホーツク文化の起源の問題に答えることは、この論文の目的ではない。これまで十分な試みが行われてきたにもかかわらず、意見の一致はみられていない。オホーツク文化の起源についての問題提起をこれまでと同様なやり方で行うことは、方法論的に正しいとは思えない。文化の起源を論じる前に、どのような現象について、年代はいつで、どんな地理的枠組みに立って論じているかをはっきり理解する必要がある。そこで鈴谷・続縄文問題が前面に出てくるのである。

II 鈴谷文化

鈴谷文化は、ススヤ、スタラドゥプスコエ 2・3、クズネツォーヴォ 1、アジョールスク 1、ベーリンスコエ 1、ウスチ・アインスコエ、チルコーヴァ 1 (以上 サハリン)、オンコロマナイ、香深井、亦稚、ピラガ丘他 (以上北海道) の遺跡によって知られている。この文化は地理的・年代的に 2 つのグループ、つまり鈴谷とオンコロマナイに分けられる。前者はサハリンに関係する。

その放射性炭素年代は 2,800 - 1,400 年前である。測定結果に鈴谷文化の編年考証を加えると、この文化は BC 600 年から AD 500 年までであったと推定される。文化の実際の存続期間は恐らくもう少し短かっただろう。オンコロマナイの方は、北海道の最北端や利尻・礼文島にいくつかの集落があり、そして多分サハリン南西部やモネロン (海馬) 島に各々集落があったと推定される。放射性炭素年代は 1 - 5 世紀である。

北海道では、オンコロマナイは「後北式」(続縄文) 文化と隣接していた。サハリンで鈴谷と隣接していたのは、北サハリンカディラニア式土器文化であった。

鈴谷文化は以下の特徴をもつ。

・海上交易の発達

・3 種の遺跡

すなわち集落址、貝塚を含めたキャンプサ

イト、近づきにくい立地にある人工・自然地形を組み合わせた避難所である。本拠地の集落面積は 150-200m² であり、5-6 角形の半地下式住居数軒からなっていた。

・出土遺物

土器、石製品、稀に骨、角、もっと稀には金属でつくったもの。サハリンで、確実に鈴谷文化のものである鉄製品の出土例は 2 件しかない。鹿角製の柄付きナイフ (ウスチ・アインスコエ 1) と、住居の床面から出土した鉄製未詳品 (チルコーヴァ 1) である。

「鈴谷式」土器

単純な形の丸底・尖底・平底の土器であり、普通、頸部には文様はなく、口縁は広く開く。「鈴谷式」土器の装飾の 2 つの基本型は地理的に分けられる。櫛歯文は北部に特徴的であり、縄目文は南部に広がる。このことは、すでに伊東信雄により指摘されていた。装飾は地理的特徴だけでなく、段階的特徴も合わせ持つ。鈴谷文化の早い段階では、ウチ・アインスコエー早期の砂丘コンプレックス (AA 36621-2, 540 ± 45 年 B.P., tcal BC 775 ± 20 年) や、鈴谷 (COAH 782-2, 520 ± 35 年 B.P., tcal BC 604 ± 160 年) 遺跡において、櫛や櫛歯状工具による圧痕がみられる。

鈴谷文化の後期の段階では櫛歯文はみられなくなり、代わりに縄目文になる。たとえば、ウスチ・アインスコエの河畔の住居では、櫛歯文を施文された「鈴谷式」土器はない。スタラドゥプスコエ 3 の遺跡では、「櫛歯文土器」は、縄目文による「鈴谷式」土器とは別に発見された。ベーリンスコエの住居跡では、川の右岸で丸底の「縄目文土器」が、左岸で尖底の「縄目文土器」がみつかった。ガルブーシャ (コルサコフ区) の住居址では「櫛歯文土器」は「縄目文土器」の包含層よりも下、且つ続縄文土器の上の層位に含まれる。それ以外に、鈴谷の装飾には、スタラドゥプスコエ 3 の土器に広くみられる斜めの刻文がある。菊池俊彦は、刻文土器はこの「十和田式」土器のあらわれる前に北方からきたので

はないか、というテーゼを提出した。

「鈴谷式」土器の装飾の中には、縄目文と櫛歯文による多種の組み合わせだけでなく、その元の要素である縄や櫛による文様もある。弦状に細くよった縄、2, 3本の紐を縫り合わせた縄、間隔をあけて革紐に巻いたものや、紐や丸い棒にコイル状に巻きつけたものなどが見られる。さらに口唇を細い撚紐で装飾した土器もある。櫛歯文は3種類に分けられる。刺突文に近い列点状の圧痕、工具先端が櫛歯状になる“キャタピラー”型圧痕、それに歯車状圧痕（ワラジ虫文）で、縄目文に似ている。とはいえ、「鈴谷式」土器の装飾はこれらだけに限られない。斜めの刻文を施文した多くの土器もある。

石器

早期の鈴谷文化の遺跡では多くの石器が見つかる。これらは典型的な新石器の技術様式、つまり、両面加工、磨製、両面剥離によって、形の多様性を残したままつくられたものである。最も典型的なのは割截用の断面方形または幅広方形の石斧（このような斧は「十和田期」においても保持される）や、刃部が半月状の柄付ナイフ、エンド・スクレーパー、サイド・スクレーパー、小さな無柄石鏃から大きな石槍までの、ありとあらゆる形・サイズの投擲具である。鈴谷文化の後期の遺跡、例えばウスチ・アインスコエでは、石器の数は少なく、目立ったものもみられず、代わりに鉄器が出てくる。

骨角器

鈴谷文化の骨・角製品のタイプ分けについては、研究が少ないため言及しない。

III サハリンにおける続縄文文化

本章では、20世紀中にサハリン島で発見された続縄文期の遺跡の記述と解釈を試みる。その目的は、余り知られていないこのテーマに関する情報を公にすることにある。

A. アニワ文化の遺跡

1985 - 89年にサハリン南東部において、「ユージュナヤ2」「ケドリンカ」（プレドレフリャンカ）「バ克蘭」「パヴロフカ」集落址をはじめ、高度の共通性を示す文化複合を特徴とする幾つかの集落址が発掘された。

A-1 ユージュナヤ2遺跡（図2-23）

当遺跡は、同名の集落の辺縁部に位置し（図3）、海拔12mの海岸段丘上に14軒の住居址（窪み）が存在する（図4）。272㎡にわたって発掘を行った結果、面積がそれぞれ40㎡、24㎡の四辺形をなす僅かに掘り下げられた竪穴住居址2軒を確認し、理論的な再構成を行うことができた。いずれの住居址も入り口は盛土による傾斜路が設けられ、壁面は白色粘土が塗られて石で補強されており、恐らくは四周が編垣で覆われていたと推定される（図5）。上屋構造は、柱穴に立てられた主柱と、垂直もしくは傾斜する支柱が配される。アニワ文化の集落にとって弁別的な特徴は石組みの炉で、排水溝が認められることもある。排水溝は家屋内に掘られる場合もあるが、住居間に設営されることもある。石組みの炉は、ユージュナヤ2、ケドリンカ、ススヤ、チルコーヴァ1、クズネツォーヴォ1といった、島の最南端に立地する遺跡にのみ見出される。

ユージュナヤ2遺跡からは315点の土器片が

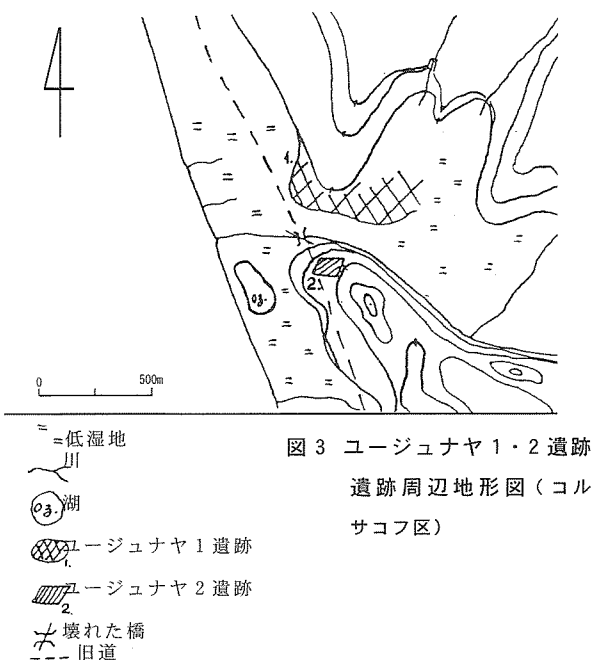


図3 ユージュナヤ1・2遺跡
遺跡周辺地形図（コル
サコフ区）

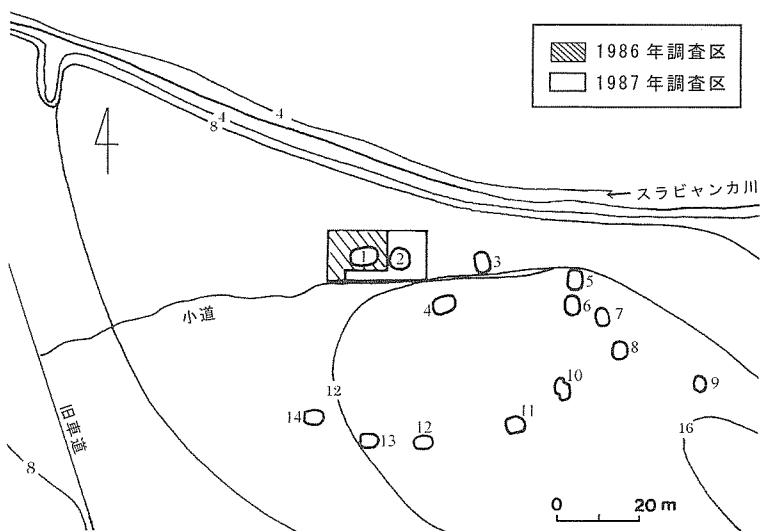


図4 ユージュナヤ2遺跡 調査区と竪穴住居の分布

出土し、不完全ながら8点の、胴部が膨らみ、頸部の作りだしをもたない内湾する器形の平底土器を復元することができた(図6)。52%の土器片は全面に、縄文土器の装飾である縄文が施され、水平に配された縄線文や刺突貫通孔により装飾されている。48%の土器片は無文である。土器の

器壁は4-6mmで、北海道における類例より薄めである。器壁の構成、底と胴の接合部、口縁部の縁取りから見て、土器は輪積み方式で積み上げられた頸部以下の本体を、底部と接合する形で製作された(と想定される)。胎土には細砂が加えられている。焼成温度はおよそ摂氏600℃である。

アニワ文化の土器はその文様から、前期縄文の伝統に帰属せしめられる。かかる伝統の特徴を考慮し、またその地理的局地性にも鑑みて、サハリンの縄文土器には「アニワA」「アニワB」という、二つ

の地方群が区分される。これら両群にとって特徴的な要素は、薄い器壁、本体器形の極度の単純さ、すなわち、内湾する口縁と膨らんだ胴部を有する容量の大きな平底土器である。

「アニワA」式の装飾はいつも一様で、やや傾斜する縦行縄文と等間隔の円形の刺突貫通孔であ

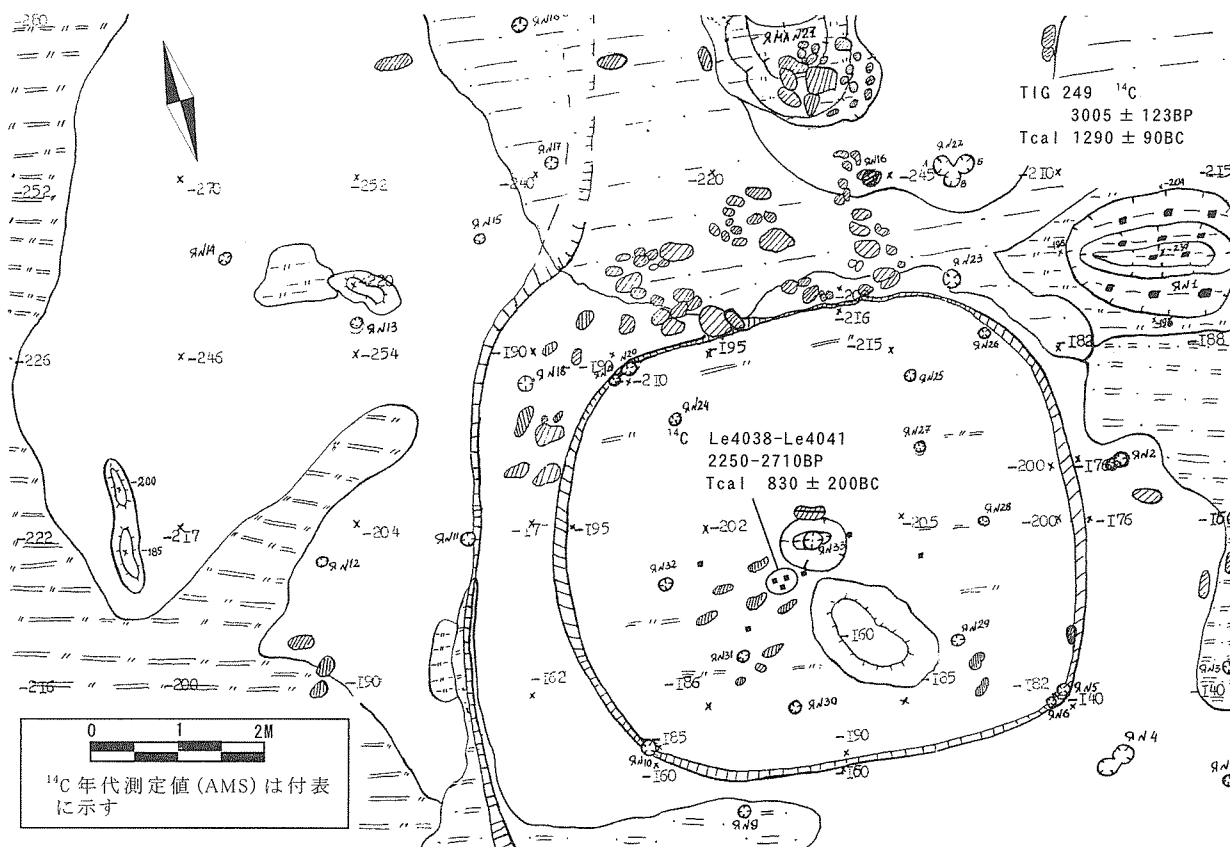


図5 ユージュナヤ2遺跡(調査区I) 1号住居址(1986年)

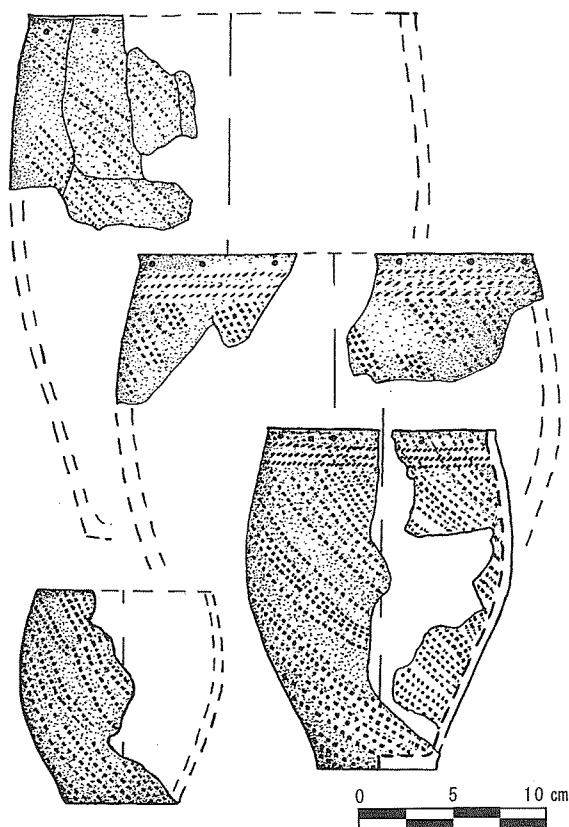


図6 ユージュナヤ2遺跡 出土土器
「アニワA」および「アニワB」タイプ

る。「アニワB」式もやはり同様の施文であるが、その上部には口縁部に沿って1-2本の縄線文が施される。伊東信雄によって記述された「遠淵」式土器はもっと複雑な装飾を有する。加えて、この「遠淵」式土器は図版が未刊行であり、われわれは「遠淵」式のコレクションを観察する機会に

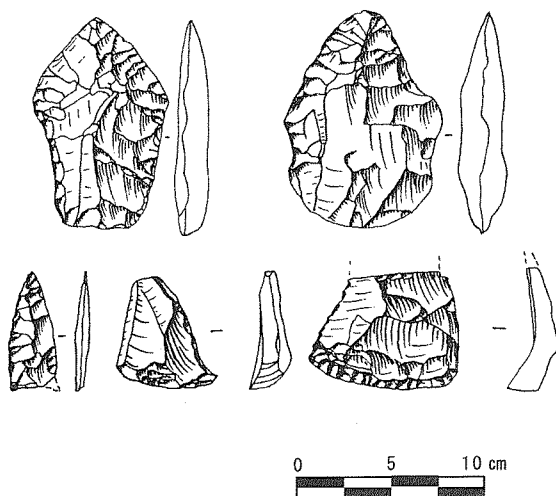


図7 ユージュナヤ2遺跡 出土石器

もいまだ恵まれていない。

遺跡出土の石器は、仕上げの完了した磨製石器(146点)、磨製石板で代表されるが、さらに破片、フレイク、チップ、削片、多面体の礫石核(1,068点)、また磨製石板や敲石も認められる。石器の間で優勢なのは、有柄石鏃や無柄石鏃とその破片(74点)、柄付きナイフや三角状ナイフ(16点)、刃部を有する台形状、或いはその他の形状のエンドスクレイパー、さらにパンチ、石錐、および不定形の破片(18点)である(図7)。磨製石器では鑿と手斧が各1点、すなわち鑿の破片と全面磨製の扁平な手斧が見出される。また頁岩やサハリン産の赤色琥珀製の梨形ペンダントやビーズも認められる(全部で4点)。

全石器の80%以上は北海道産の黒曜石であるが、その他は頁岩、フリント、石英、安山岩で作られている。黒曜石の石核は全くみられず、その剥片もきわめて僅少で、高々全体の6%を占めるに過ぎないが、2次加工で生じるフレイクはかなり広く見出される事実を特記しておく。

したがって、黒曜石は半製品の形で遺跡まで持ち込まれたと推定される。黒曜石製品がアニワ文化の全ての遺跡で例外なく多数見出される事実は、原料産地との間に恒常的かつ継続的な関係があったことを示唆する。黒曜石産地としては至近のものが北海道にある。

「ユージュナヤ2」遺跡の1号住居址からは4点の炭化物試料が採取されたが、その年代はBC 800-300年の範囲内と測定された。補正された年代結果を検討した結果、われわれはBC 8世紀中葉からBC 4世紀末までの年代値を得ている。もしも炭化材自体の樹齢を考慮するなら、BC 700-300年となる。

住居址間の地層から得られた炭化物や貝殻の与える3件の年代は、後期新石器の前期段階、すなわちBC 2,000-1,300年の範囲内であった。恐らくこれらの年代は、同遺跡のより早い時期の文化複合に比定されよう。その存在を示唆するものとしては、住居址間の空間で検出された炉址の一つから出土する片面加工石器、櫛歯文が施された土器の発見が挙げられる。そのほかに、マイクロブレード製の石鏃が得られており、およそ8,000-7,000年前に比定される。同遺跡にとっては最も早い時期の人類の居住を示唆する。

A-2 ケドリンカ（プレドレフリヤンカ）集落址（図 2-27）

この遺跡は、サハリン最南東端にあるトニン・アニワ半島の東岸、オホーツク海岸の最南端で、ケドリンカ川左岸の標高 25 m の切り立った残丘に立地する（図 8）。コルネリヤ岬までは南へ 5 km、ユージュナヤ村は南西に 17 km の距離にある。レフリヤンカ川までは北へ 2 km である。

1985 年に発見された同遺跡では、1987 年に 10 m² を占める 6 号住居址が発掘された。出土した遺物は 4 群に区分される（図 9）。

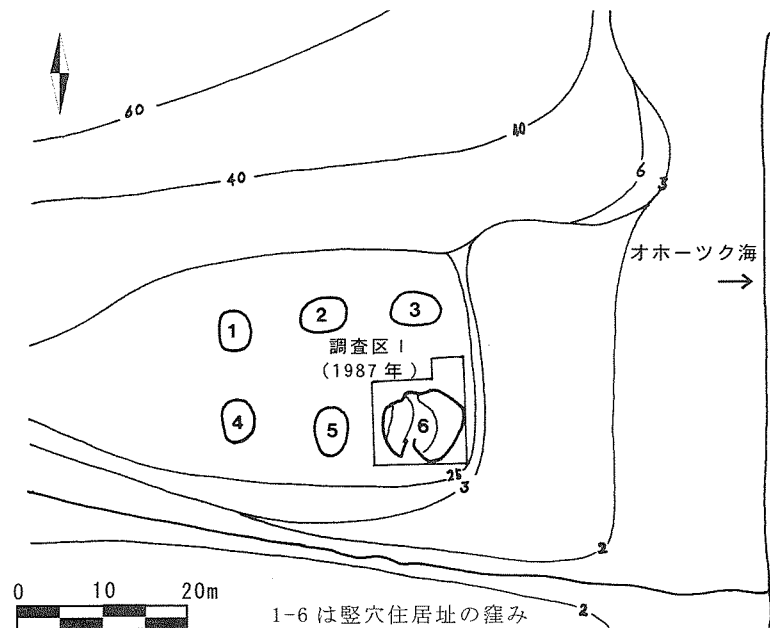


図 8 ケドリンカ遺跡地形図（コルサコフ区）

1) 最古層は、恐らく縄文晩期か

ら続縄文初期までの範囲に収まる年代と推定されるが、傾斜した縦行縄文と貫通した刺突文の組み合わせをもつ土器（46 点）で代表される。黒曜石製品、刃部を有するエンドスクレイパーや玄武岩製の短い柄つきナイフ、そして恐らくは刃部が葉形のナイフも、やはり土器と同時代に比定される。土器はユージュナヤ 2 遺跡で設定された「アニワ B」式に類似する。

2) 第 1 群の土器よりもやや新しいものが、1987 年に発掘された住居址に関する土器である。住居の床面で採集された土器片（口縁部、底部、装飾をもつ破片、合計で 90 点）に基づいて、明瞭な頸部と外傾する口縁部を有する、形がよく整った平底土器が復元されている。その文様は 3 種の基本要素からなる。

- ・「突瘤文」：先の丸い棒を容器の内側から押し付けて得られる、口縁部外面の丸い突起
- ・縄線文：類似の文様は鈴谷文化や続縄文文化でも知られている
- ・櫛目圧痕文と型押文

卓越するのは「突瘤文」と縄線文の組み合わせ（48 点）であるが、「突瘤文」と櫛目圧痕文の組み合わせ（8 点）も稀に認められる。恐らく若干の石器もこの土器とは同時期に比定されるであろう

が、具体的に確定するには至らない。この土器は「アニワ D」式と命名されている。

3) 第 3 の土器群（18 点）は、細めの櫛歯文で装飾された口縁部の破片であるが、そこには型押文との組み合わせが見られることもある。この土器は、鈴谷文化の後期段階に典型的なものである。全ては第 1 層から出土しており、発掘された 6 号住居址とは関係しない。

4) 住居址間の空間から出土する遺物は、オホーツク文化の「江の浦」式土器に比定される。

6 号住居址は 59 m² の面積を占める楕円形の竪穴住居である（図 10）。長軸（8m）が南北方向、短軸（7m）は東西方向に配される。住居の入り口は南に面し、傾斜路を呈する。側壁は 15-20 cm と低めで、北側にだけある。床面が傾斜して掘り込まれているところでも、その深さは 60-70 cm である。壁面は白色粘土で補強されており、その痕跡が住居の輪郭に認められる。住居内は東西に区画（面積がそれぞれ 15 m² と 44 m²）されており、西側の区画が居住スペースで、そこに炉がしつらえてある。西の区画は恐らく、前代の住居址を次の住民が再利用したものと推定される。なぜなら床面から年代を異にする「アニワ B」式や

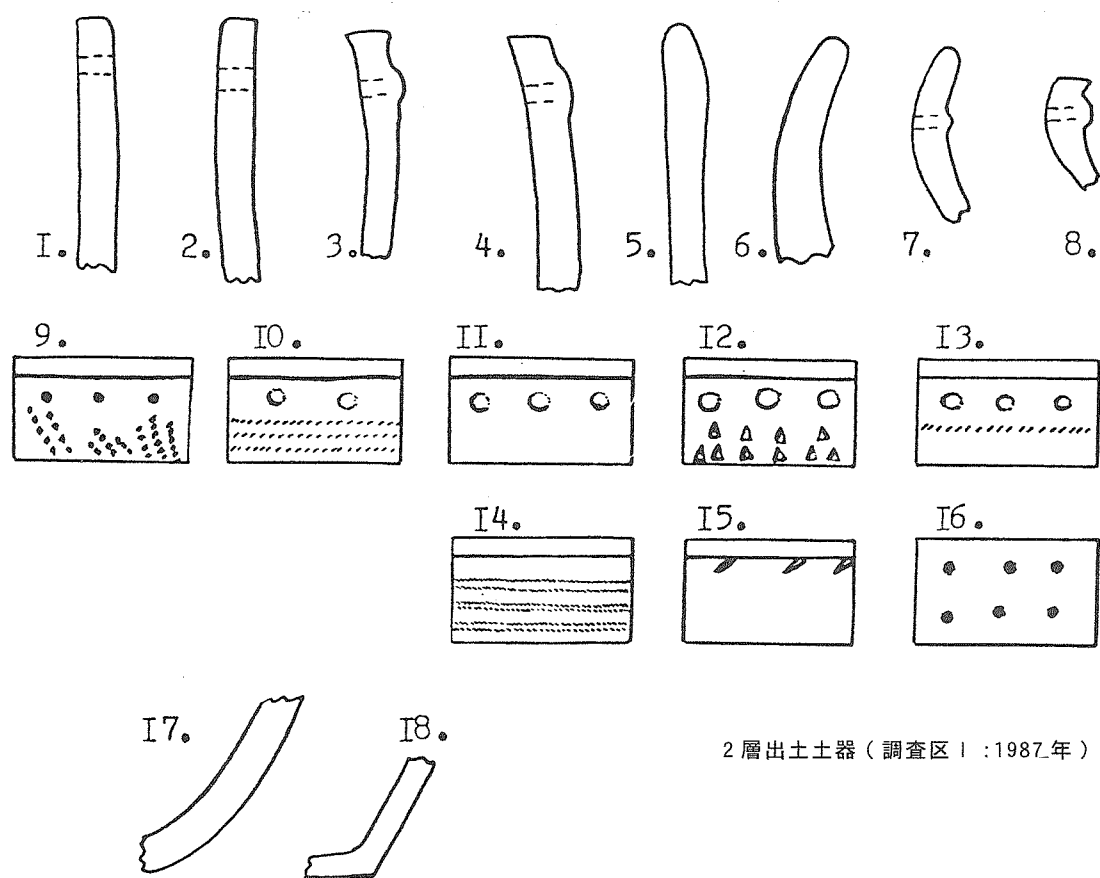
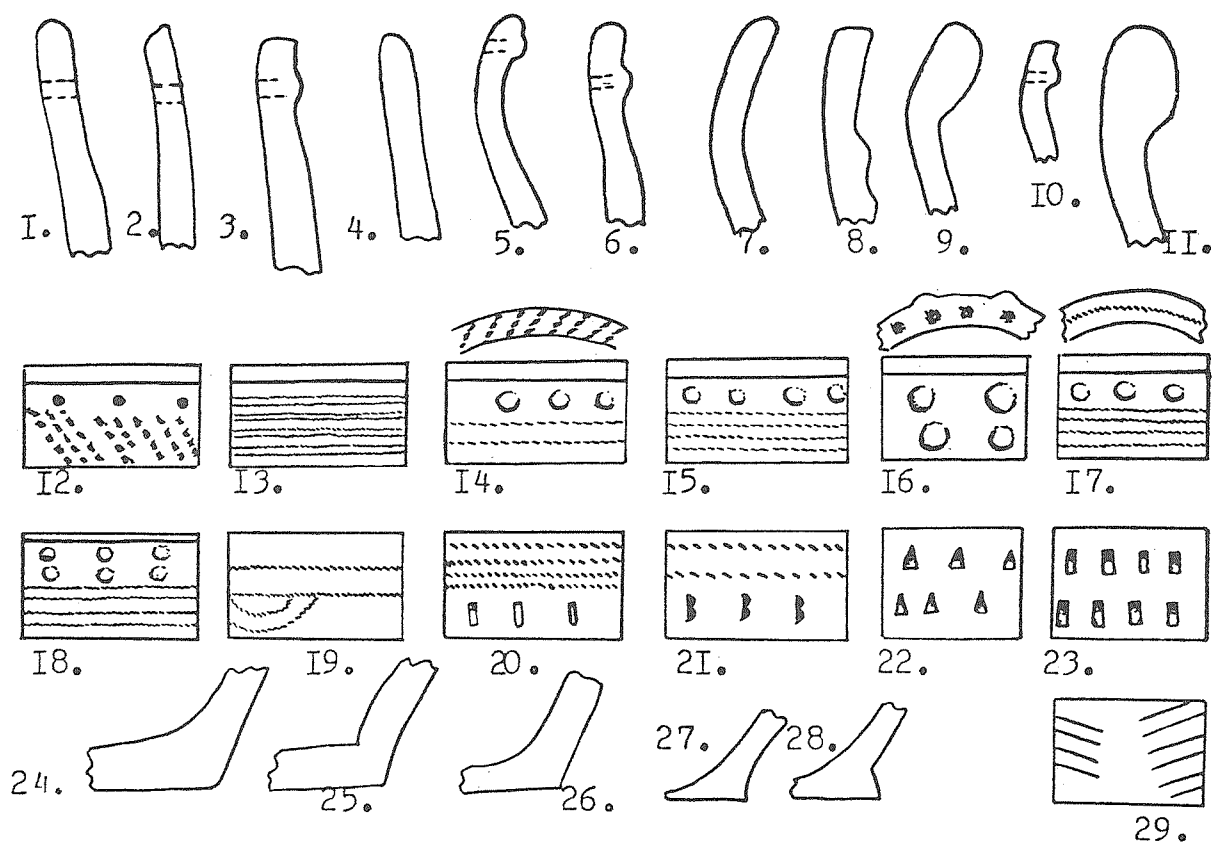


図 9 ケドリカ遺跡 (調査区 I) 出土層位別土器

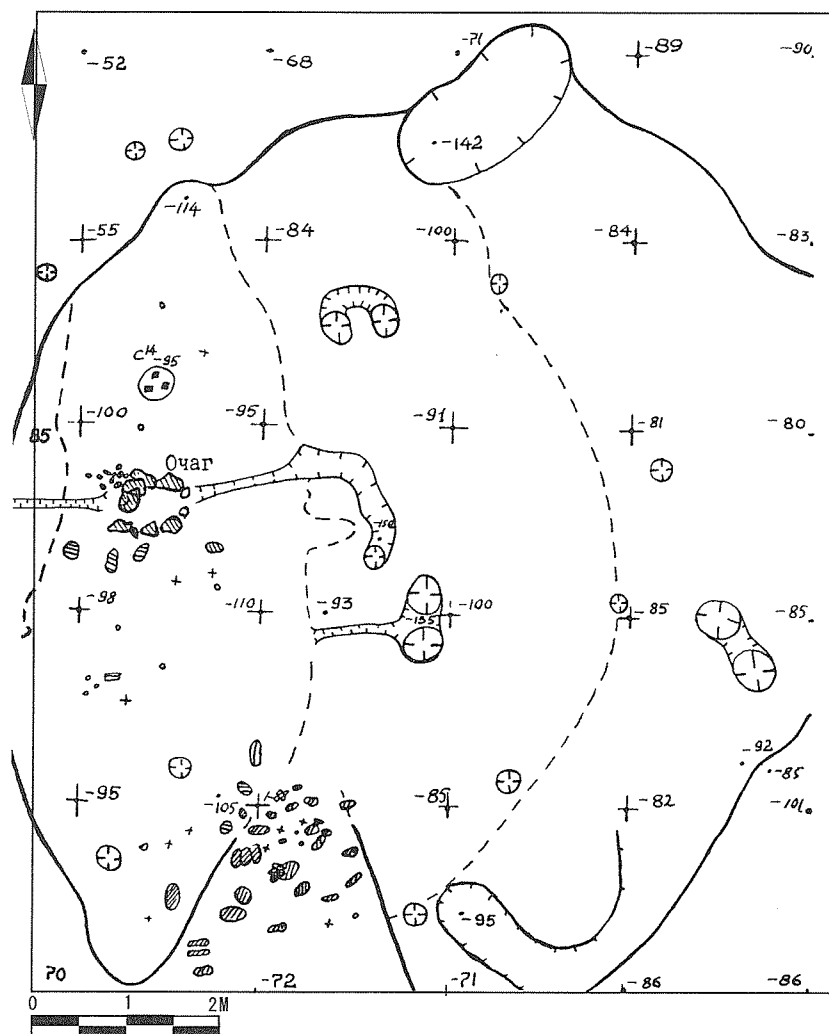


図 10 ケドリンカ遺跡 6 号住居址 調査区 I (1987 年)

アニワ D」式土器が出土する事実がそのことを示唆するからである。

炉は 9 個の川原石からなり、直径 40-60 cm の楕円状に配置されている(図 11)。長軸は東西に、短軸は南北方向に走る。炉を通る 2 本の溝は、1 本が側壁から、いま 1 本は住居の中心から掘られている。古代においても炉は清掃されており、そこからの残灰が床面に堆積している。入り口は石敷きの傾斜路をなす。

住居の骨組みは、掘りこみの周縁部に配置された12本の外壁支柱と、家屋の中央部に配された枠組みを支える5本の支柱からなる。

「アニワ B」式と「アニワ D」式土器は、その器壁から採取された炭化物の分析に基づき、2種の年代が得られている(表1)。われわれの見るところ、これらのデータは古く出すぎており、恐らくは同遺跡における最古の人類の居住に由来する

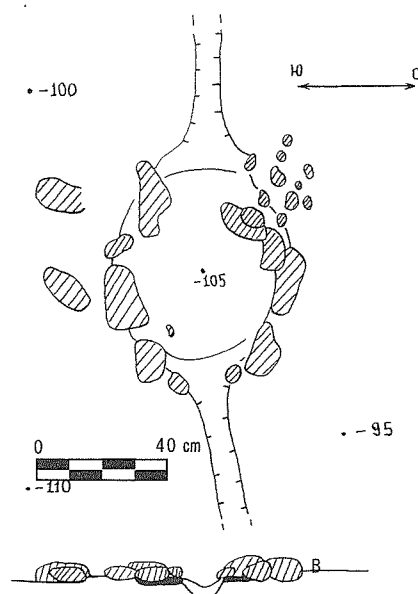


図 11 6号住居址(1987年)検出の石組み炉

遺跡名, 出土地 分析資料 標本の採集者, 分析担当者	標本番号	一次年代 (BP)	補正值 (BC)	補正值 (BP)
ブレドレフリャンカ, 1号住居 縄線文と「突瘤文」を伴う土器の付着残滓 ワシリェフスキー, クズミン, ジャル	AA23131	2800±45	950±45	2900±45
ブレドレフリャンカ, 1号住居 縄線文と「突瘤文」を伴う土器の付着残滓 ワシリェフスキー, クズミン, ジャル	AA25440	2740±45	875±40	2825±40

表1 ケドリнка (ブレドレフリャンカ) 遺跡の ^{14}C 年代測定値

ものと思われる

A-3 ユージュナヤ村, 第14集落址バクラン (図2-26)

1985年に発見された「バクラン」集落址では、1993年に測量、撮影、試掘および表面採集が実施された。

この集落址は、バクラン岩と称される黒色花崗岩の岩峰から南に0.1kmのオホーツク海岸にある。ガルブーシャ川河口の南方3km、滝を伴う小川の左岸にある岩層を伴う海岸段丘上に立地し、高度は海拔16-18mである。滝の東方100m、オホーツク海岸からは30mの距離にある遺跡は、上記段丘の緩斜面の断崖際に位置する。整った形の5箇所窪みが認められる(大きさ4×4m, 5×4m, 6×4m, 深さ0.4-0.8m)。推定される文化層の広がり住居址から10-15m以内の範囲と見られる。このことは表面採集によって断崖際では文化層がほとんど認められず、岩層と芝土に挟まれた、せいぜい15-25cmの薄いローム層しか確

認できなかったことから裏付けられる。

試掘坑(1×1m)から出土した資料は、全面に縄文の装飾が施された土器片、細い縄線文と不貫通の刺突文、すなわち「突瘤文」を伴う口縁部が中心であり(図12)、黒曜石の剥片や割石、また石鏃の破片も見出される。これはアニワ文化に典型的な遺物で、筆者によるケドリнка住居址の発掘報告(Vasilevski 1988a・b)で周知のものである。推定される文化段階と資料の年代は、サハリンにおける変種である縄文文化の前期、すなわち鈴谷文化以前のものか、或いはおよそBC5-1世紀に比定される鈴谷文化前期の範囲に収まる。文化全体に対する年代は当面未決着であるが、当遺跡の土器が「アニワA」「アニワB」式の土器よりも遅くに出現したことは、文様から明らかである。そこに「突瘤文」が認められる事実は、この装飾要素を担う北方文化との接触によって説明される。地縄文に縄線文と「突瘤文」を伴うこの土器を、「アニワC」式と命名する。

A-4 クルーゼンシュテルン村, 第4集落「パヴロフカ」(図2-24)

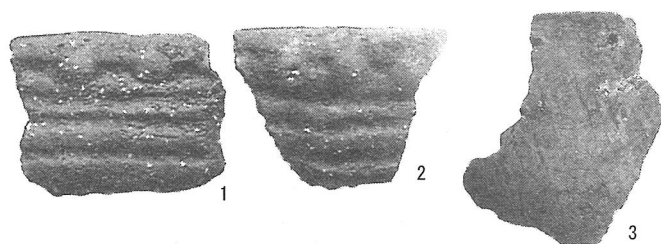


図12 バクラン出土の「アニワC式」土器(1,2)と「アニワA式」土器(3)

遺跡は、パヴロフカ川右岸の同名の(パヴロヴィチ)岬から北へ0.5km、半島の東海岸のチャイカ川から南へ3kmの地点に立地する。集落址は海拔20mの段丘(南北40m, 東西55m)上に位置する。ここは平坦な土地であるが、東側にはオホーツク海に面する険しい断崖があって、北は川に臨む断崖、南は急峻な山の斜面が迫り、そして

西側は涸れ川の河床に接する。パヴロヴィチ（パヴロフカ）川は白大理石の丸石が敷き詰められた深い溪谷を貫流し、断崖の麓には中央に小丘と湧き水を配する独特のカール谷が展開するため、かなり風光明媚な土地である。集落址は事実上攻略不能で、天然の要害をなしている。

遺跡は住居址の5箇所の窪み（ $3 \times 4 \times 1\text{m}$ 、 $3 \times 3 \times 0.6\text{m}$ 、 $4 \times 4 \times 0.7\text{m}$ 、 $3 \times 3 \times 0.2\text{m}$ 、 $4 \times 4 \times 1\text{m}$ ）からなる。これらの立地には特定の意図が認められないが、ほぼ「鳥の巣」状を呈する。断崖の斜面には包含層も遺物も一切見出せなかったため、3号住居址内に $15 \times 1\text{m}$ の試掘坑が掘られた。試掘坑内では以下のような層序が認められた。下層に腐植土を擁する芝土層（9-10 cm）、風成灰色砂の混入する明褐色の純ローム土壌（最大でも20 cm）と大理石丸石の堆積、焼けた黒色腐食ローム層（10-12 cm）、炭化物を伴う暗褐色ローム土壌（恐らく、これが住居の床面）。この暗褐色ローム土壌は10-15 cmにかけて明色化して、地山の岩盤に続いている。

底面に白色粘土を塗った12個の丸石で構成された炉の石組からは、炭化物が多数見出されるとともに、全面に縄文が施された土器片数点、また「突瘤文」と縄線文を伴う口縁部（「アニワC」式土器）や黒曜石の剥片も出土する（図13）。資料は専ら黒色ローム層や、床面に相当する暗褐色ローム層に属する。白色粘土の塗布、炉の石組み、上述の2種の土器タイプ類型、黒曜石の組み合わせは、筆者が1985-87年に実施したユージュナヤ2、ケドリンカの発掘を基に析出したアニワ文化の第2段階を代表する全ての遺跡に特有のものである。パヴロフカ遺跡の資料は、ケドリンカ、

バ克蘭遺跡の資料との間で見事な相関を示している。

A-5 文化編年の試みとその特徴

1985-87年に実施された研究の総括に基づいて析出されたアニワ文化は、放射性炭素年代決定法により、2,710-2,250年前と測定された。同文化について想定される暦上の年齢はBC 5-2世紀である。同文化複合にとって特徴的な要素は次の通りである。

- ・海岸に立地する集落の配置は、環状ないし鳥の巣状のプランである。
- ・平面図が楕円状の僅かに掘り込まれた住居、壁の粘土塗装、石組みを伴う炉、傾斜路を呈する住居の入り口。
- ・3型式の土器類型。縄縄文に特有のやや傾斜した縦行縄文と口縁部に施された刺突貫通孔を伴う土器（アニワA）、これに加えて縄線文（アニワB）、さらには縄線文と「突瘤文」も併せたタイプ（アニワC）。
- ・石器加工に認められる黒曜石の卓越、柄つきのナイフや半月状の刃部を持つ台形状スクレイパーが特徴的である。

「ユージュナヤ2」タイプの遺跡群の分布は、サハリンの東南部に局限される。このグループは一方で、晩期新石器文化に当たる縄文文化に遡及する、一連の鮮明な諸指標によって特徴付けられる。これらの指標は、サハリンに典型的な北方的性格の文化とは一線を画すものである。土器製作に見られる縄文文化の技術・施文伝統に対する志向性、石器加工に認められる原料（黒曜石）の輸入は、この文化の南方起源を直接的に証明するものである。

他方では、「アニワC」「アニワD」式の土器型式が南方的特徴（縄線文）を保持するのみならず、北方的な性格（突瘤文）も示すことは明らかである。アニワ文化の諸遺跡は、北海道の住民の一部がBC 1000年紀の前半から中葉にかけてサハリン東南部へ進出してきた事実を直接的に示すものとする。当初の文化伝統の保持と固有の文化伝統の形成は、両者の継承関係を示唆するものである。われわれはアニワ文化を、島嶼世界の南

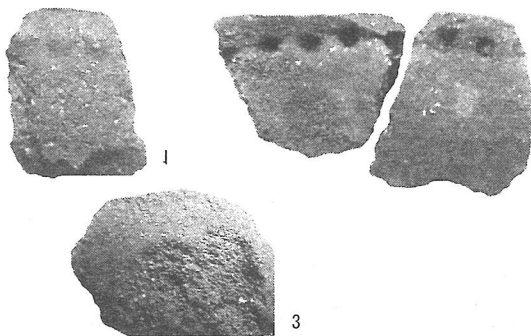


図13 パヴロフカ出土の「アニワC式」土器
表面（1）、裏面（2）、回転縄文をもつ胴部破片（3）

部と北部の間に介在した接触地帯で形成された、初期縄文文化のサハリンの変異（アニワ型変異）と定義する。われわれは、アニワ文化がこの圏内で唯一の孤立したサハリン文化ではなかったと考える。

「アニワ」式土器は、島の南西部や中南部に残された他の諸遺跡から出土する縄文期の土器とは区別される。島の南部では、典型的な縄文文様を伴う土器が、スタラドゥプスコエ3、クズネツォーヴォ1、クズネツォーヴォ2などをはじめ、かなり広範に見出される。そして、「アニワ式」土器はこれらの遺物の間でも、伝統の統一性と単純さで際立っている。

B. 縄文文化の遺跡

樺太時代における日本人考古学者の研究に関してわれわれが承知するのは、数件の縄文土器の発見例に限られる¹⁾。先ず第1例としては河野広道の多蘭泊（カリーニナ）における樺太縄文土器²⁾の発見、第2例が遠淵（ブッセ）湖において伊東信雄が発見した最も有名な遺物、そして第3例は、サハリン州郷土博物館において、麻内地区で採集されたコレクションと伝えられる、典型的な縄文土器³⁾である。新岡武彦・宇田川洋の共著では、木村信六がアサナイ（ザヴェティ・イリイチャ）で採集したコレクションとして言及されている（新岡・宇田川1992）。さらには、クリリオン岬における縄文を伴う土器の発見についても言及がある（Golubev 1973）。恐らく、その他の事実もありうるだろうが、われわれには遺憾ながら伝えられていない。

20世紀最後の数十年間に、サハリンでは幾つかの場所で縄文を伴う土器が発見されている。以下では、それらについて紹介する。

B-1 クズネツォーヴォ遺跡（図2-14）

1979年、V.A. ゴルベフはクズネツォーヴォ1集落址（宗仁貝塚）で発掘を開始、その下層文化層で縄文を伴う土器が発見された。のちに、ゴルベフと筆者が指揮を執った1980-1985年の発掘でも、縄文土器を伴う文化層が見出された。縄文文化層は鈴谷文化と十和田文化に属

する住居によって破壊されていた。¹⁴Cによる最早期の年代は、 $693-2,750 \pm 150$ BP; tcal. 916 ± 124 BC（以上MAGによる測定値）および $91-2,384 \pm 270$ BP; tcal. 495 ± 325 BC（以上DVGUによる測定値）で、同遺跡における縄文層と鈴谷層間の編年的相関関係のある程度まで反映すると考えられる。クズネツォーヴォ1遺跡出土の早期の土器において、われわれは尖底土器と丸底土器が代表する北方伝統と、全面的な縄文文様の南方伝統の混在を見出す。クリリオンの土器は、仮説的に鈴谷と縄文の中間タイプとして定義することができよう。そうする以外には、縄文を伴う丸底土器と平底土器の並存を説明することは困難である。クズネツォーヴォの北のガルブーシャ川の砂丘においても、そのような土器片が散発的に発見されている。

B-2 トニン岬集落址（図2-28）

1980年代にはV.O. シューピンがトニン岬で集落址を発見し、1992年にはI.A. サマリンと筆者が表面採集と地形撮影を実施して、遺跡の登録を行った。集落址は6軒の住居址からなり、そこからは縄文、突瘤文、縄線文を伴う「アニワC」式土器や、黒曜石の剥片が発見されているが、これはサハリンの縄文文化に典型的な組み合わせである。

B-3 ガルブーシャ遺跡（図2-12, 図14）

1993年、バ克蘭村からほど遠からぬガルブーシャ川右岸の段丘において、筆者とP.V. カシツィンは試掘坑により多層遺跡の存在を突き止めた。試掘坑には下層から上層にかけて、以下のような5層が連続して堆積する。

傾斜した縄文をもつ土器を出土する5層（170-160 cm）、櫛目圧痕文を伴う「鈴谷式」土器を出す4層（160-100 cm）、縄線文と斜めの刻文を伴う「鈴谷式」土器と、「江の浦」式土器とが共伴する3層（200-70 cm）、そしてオホーツク文化の「江の浦」式土器を出土する1-2層（70-0 cm）である。

B-4 スタラドゥプスコエ3遺跡（図1-10）

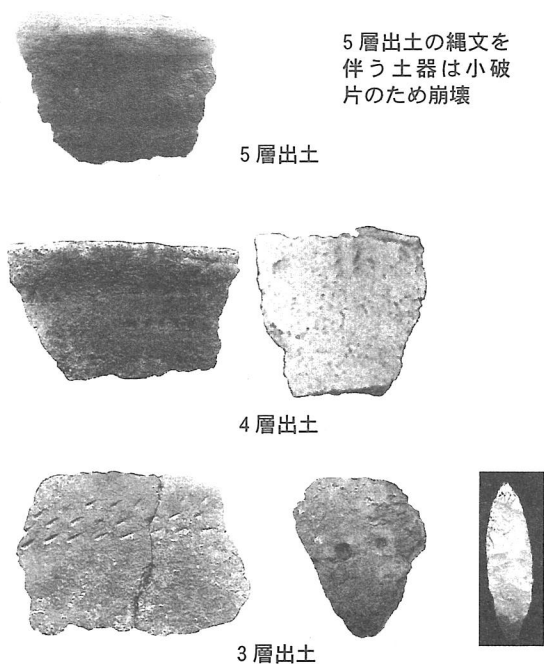


図 14 ガルブーシャ遺跡 試掘堀出土土器・石器

1989 年、N. V. プロトニコフはスタラドゥプスコエ 3 (乙名が丘) 集落址における第 3 次発掘で、続縄文に典型的な施文である傾斜した縄文を伴う土器片を発見した。翌年の第 4 次発掘では筆者が炉址を発見、そこには続縄文初期の土器⁴⁾ 3 個の残骸が原位置にとどまる形で横たわっていた。

B-5 ハザールスコエ遺跡 (図 2-29)

1990 年中葉、オホーツコエ村近くのハザールスコエ湖畔にある砂採場の主人が、約 70 cm の深さのところで石組みの炉を発見した。彼から発見の知らせを受けた V. O. シュービンは、サハリン大学の学術ステーションから至近の距離にあるこの遺跡の発掘を手懸けるようわれわれに勧めた。1996-97 年、筆者は前田 潮、V. A. ゴルベフ、P. V. カシツィンとともに遺跡の平面図を作成した。遺跡は、堆積した古代の風成砂層上に設営された 11 個の石の集積で構成されていた。これらの石積みの間には、若干の土器遺物や剥片石器、そしてまた 2 個の炉も見出されたため、われわれは発掘を実施した。その結果、特別に選んだ平石を楕円状に集積した炉には、炭化物が層をなし、その中には焼けた (恐らく魚の) 小骨が認められる、といった事実が判明した。傾斜した細かい縄

文、縄線文や「突瘤文」を伴う土器 (「アニワ C」式) に関しては、トニン、ケドリンカ、クズネツォーヴォ 1 (下層) といった、続縄文遺跡の出土品のうちに明瞭な類例を求めることができる。この遺跡は、漁撈民の季節的なキャンプと解釈される。

B-6 アトラソヴォ遺跡 (図 2-16)

クリリオン半島東岸のアトラソヴォ村でも、縄文を伴う土器片が散発的に発見されることが知られている。

B-7 モネロン島 (図 2-13)

モネロン島では、ウーソヴァ、テレグラフィヤ・スタンツィヤ多層遺跡の下層文化層から縄文を伴う土器片が出土している。

B-8 ウスチ・アインスコエ 1 遺跡 (図 1-9)

続縄文期の傾斜する細かい縄文を伴う土器の発見例の北限は、1993 年にウスチ・アインスコエ 1 集落址の河畔に位置する鈴谷文化の住居址内の覆土中から検出された、割れた土器片の事例である。

サハリンにおける続縄文の遺跡に関する情報は、以上の通りである。ここから導かれる結論は以下の 3 点である。第 1 に、サハリンにおける続縄文文化の存在は、かつて考えられていたように、散発的な接触や影響関係に局限されるものではない。第 2 には、その諸文化集団の地理的分布をトニン、アニワ、クリリオン半島の領域に求め、続縄文社会集団との境界は仮説的ながら、サハリン南部の中央地区 (スタラドゥプスコエ 3) に引くこととする。第 3 に、サハリンにおける続縄文諸文化の存続時期に関して最も蓋然性の高い年代設定は、BC 1000 年紀の半ばから前半にかけての範囲ということになる (図 15)。

IV 考察

鈴谷文化とその同時代文化である続縄文文化の相互関係の問題を理解する鍵は、以下のような

くつかの重要な事実と考察である。

1. 南サハリン、モネロン（海馬）島、利尻・礼文島と道北部では、早期続縄文の層位は、早期「鈴谷文化」層の下か、または同じレベルとなっている。サハリンにおける早期続縄文や早期「鈴谷文化」の包含層の放射性炭素年代はほとんど一致しており、2,900-2,150年B.P.である。平均的、そしてもっとも真実に近いと思われる放射性炭素年代は2,600-2,300年B.P.である。これらの包含層の平均的測定年は、BC 600-300年の範囲を変動する。

2. 1991年にスタラドゥプスコエ3の住居址から炉がみつかり、その中から早期続縄文土器の3個の破片が発見された（図16・17）。炉の炭（AA 20865）の放射性炭素年代は2,265 ± 30B.P., BC 385 ± 10またはBC 335 ± 10年であった。ここで層位について触れておくのが適当である。クズネツォーヴォと同様、早期続縄文層（ここでは独立した文化層である炉）は、

「鈴谷文化」層と同じ層中に存在する。

後者（クズネツォーヴォ1）では、続縄文層は「鈴谷文化」の住居によって破壊されている。前者（スタラドゥプスコエ3）では、炉は「鈴谷文化」の2軒の住居（99号址、100号址）の間の同じレベルに存在する。炉は、「鈴谷文化」の人々が家を建てるのに掘った柱穴からの掘り揚げ土をかぶっていた。ということは、スタラドゥプスコエ3（紀元前4世紀）の住居址の炉から出た土器は、99号住居址と100号住居址から発見された鈴谷式土器よりもやや古いことになる。

3. 層序学的成果の最も鮮明な事実、前章のガルブーシャ川（コルサコフ区）沿岸での発見、つまり、続縄文土器が、「櫛歯文」、「縄目文」土器の下から発見されたことである。

4. サハリン中部においては、「鈴谷文化」の集落遺跡は、東岸ではなく、西岸と関わりを持っている。それらは複数の文化層からなる集落

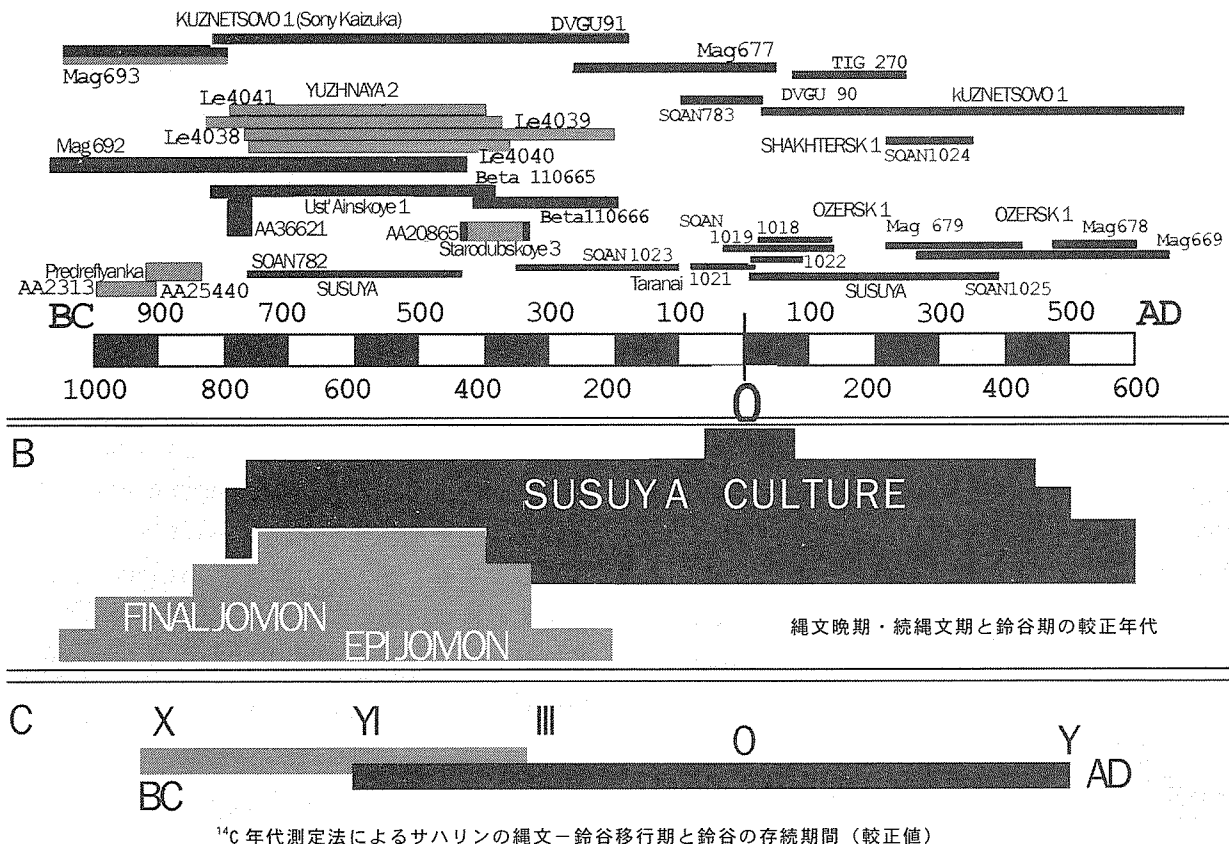


図15 サハリンにおける縄文晩期、続縄文期、鈴谷期の¹⁴C年代測定法による暦年代（較正值）



図 16 スタラドゥプスコエ 3 遺跡の位置

址、つまり、シャフチョールスク 1, ウグレゴールスク 1, パレーチェ 1, ウスチ・アインスコエ 1, ベーリンスコエ 1 である。これらの遺跡には縄文層は存在しない。ウスチ・アインスコエ 1 の「鈴谷文化」に先立つ層（第 4 層）では薄手で平底、無文の平滑な土器が見つかった。

遺跡の放射性炭素年代の下限は、ウスチ・アインスコエの砂丘の住居址から出た櫛歯文尖底土器（AA 36621）の、 $2,540 \pm 45$ 年 B.P., tcal BC 1775 ± 20 年と、この土器が出た炉（Beta 10666, 歴博 - AYN 106）

の $2,340 \pm 60$ 年 B.P., tcal BC $1,603 \pm 222$ 年という、独立した年代決定によって定められる。砂丘へ人が来てから形成された黒色層の年代は、Beta 110666（歴博 - Ayn 106）、 $2,340 \pm 60$ B.P., tcal BC 305 ± 110 年の範囲と決定された。

辻 誠一郎による砂丘・海岸段丘の年代研究から、これらの場所に人が入ったのは、3,000 年前より後といてよい。このことは、はじめの紀元前 1,000 年間には、ウスチ・アインス

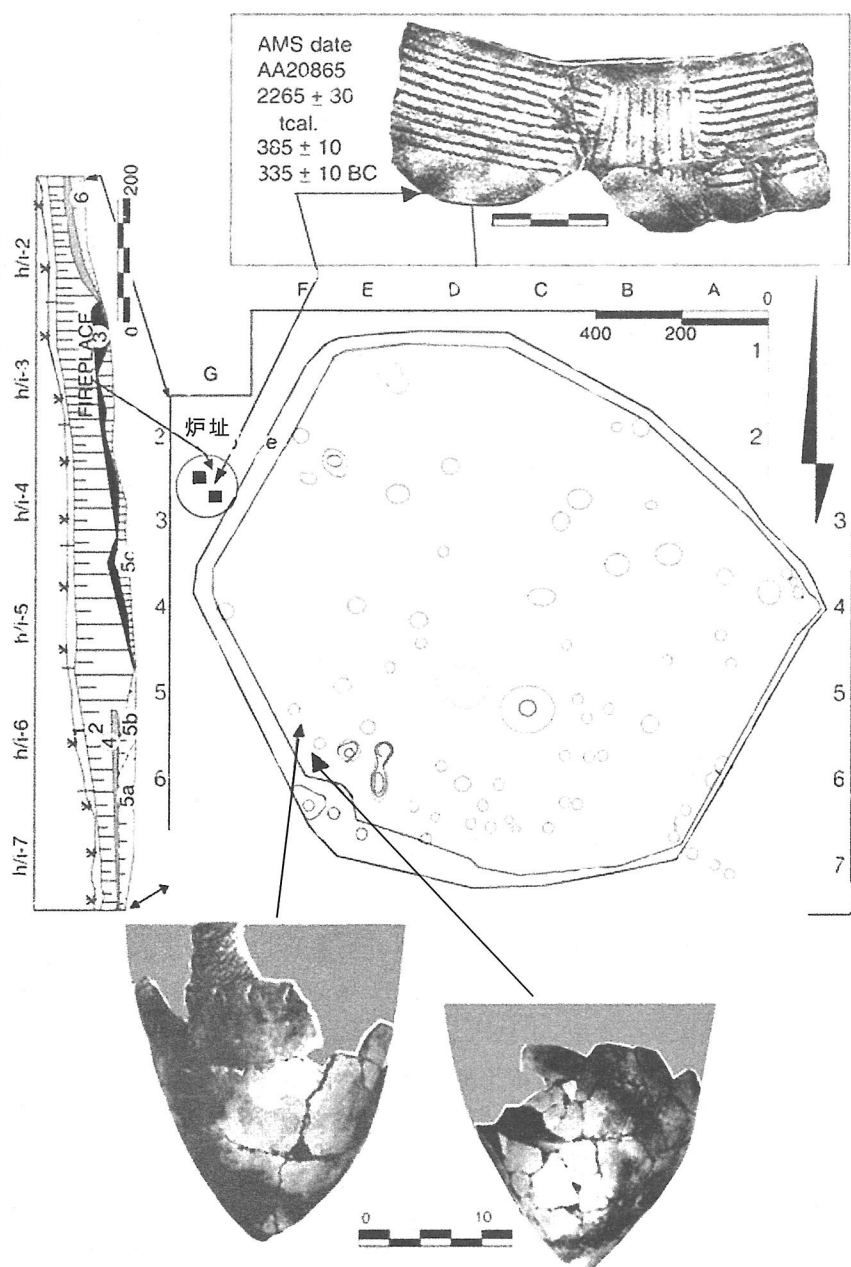


図 17 スタラドゥプスコエ 3 遺跡 鈴谷文化の竪穴住居址（100 号址）とその出土土器および初期縄文式土器を伴う炉址（1990）

コエの砂丘には装飾のない平底土器をつくらした人々が住みつき、その後櫛歯文のある尖底土器（砂丘上の住居）をつくる人々が、そして最後に縄線文を持つ尖底土器をつくる人々がその場所にとって替ったことを意味する。この最後の人々が縄文文化の伝統の持ち主と交流していたのである。それは発掘現場で縄文土器の破片が見つかったからである。

5. サハリンの最南端では「アニワ文化」のキャ

ンプサイト（クズネツォーヴォ1，ハザールスコエ，ガルブーシャ，スタラドゥプスコエ3）や集落址がみつかるが，北方（ウスチ・アインスコエ）では続縄文土器の破片がみつかるだけである。このことから，続縄文グループの集落は，サハリンの南にあり，そこでは彼らは南方から支援を受けられたのではないかと考えられる。南サハリンの中程には，続縄文の人々が北海道に去り，その場所に北方の隣人である「鈴谷文化」の人が住みつくようになる直前まで，「鈴谷文化」と続縄文文化の接触地帯があった。これは恐らく紀元前300－200年から紀元前後までに起こったであろう。それ以後ではサハリンにおいて，続縄文文化は今までのところ知られていない。これに対し，「鈴谷」グループの北海道侵入と「オンコロマナイ式」の形成は紀元後のはじめに起っている。

6. 「鈴谷文化」に占められた地帯の北側には，「北サハリン文化」が支配する地帯があった。の文化を特徴付けるカディラニア土器は，「鈴谷式」土器と以下の2点，つまり，櫛歯文，集合沈線（櫛描文），型押文，尖底・平底の器形において近いものである。この意味で，サボ，ヌィシュ，スターリィ・ナビリィ，アダ・ティモヴォの各住居址から出る土器は典型的である。「鈴谷文化」は，こうしてBC 1,000年から紀元前後までの中頃，「北サハリン文化」と続縄文文化の間に形成された。「鈴谷文化」は直接的な系譜関係にある後者から縄目の装飾をとり入れ，それは次第に櫛歯文を後退させた。

サハリンにおける「鈴谷文化」の住居址はかなり数が多く，このことから「鈴谷文化期」（紀元前5世紀－紀元5世紀）には，環境開発の努力と，サブ・ボレアルーサブ・アトランティック期（完新世：5000年前－現在）の境目の寒冷化後の温暖化を背景に生活環境が拡大したことから，以前にもまして急激な人口増大がおこったと結論できる。まさにこの人口増大のために，サハリンの原住民は南に拡大することになったのである。鈴谷－続縄文関係が，短期の競合に限られていたと考えるのは正しくないだろう。両島の接触地帯からの土器型式から，これらの過程がいかに長期に互っていたかがわか

る。両文化ははじめサハリン，次に北海道において，長期間，隣り合い，影響し合っていたのである。

本論文で行った問題提起によって，「鈴谷文化」が「十和田・オホーツク文化」と別に起った，という問題が検討できると思う。このことは，おそらく，サハリン・北海道の初期鉄器時代の研究において，新しいパラダイムをつくる方向への動きに寄与するであろう。

註

- 1) 東北大学博物館所蔵の久原房之助コレクションには，縄文中期の遺物に酷似する土器がある。付属ラベルには「樺太大泊発見」と記されているが，出土地点は不明である。
- 2) 河野広道が発見した「馬蹄圧痕文」は，「鈴谷式」土器に典型的な「馬蹄」形の縄目圧痕文であった可能性もありうる。
- 3) このコレクションは，郷土博物館収蔵庫に戦前採集の遺物として保管されている。M.M. プロコフィエフ氏から教示を受けた。
- 4) この場を借りて，当該土器の続縄文初期への帰属鑑定で協力を賜った小野裕子氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』東北帝国大學國史學會編，大東書館：17-44
- 菊池俊彦 1971「樺太のオホーツク文化」『北方文化研究』5：31-53
- 河野広道 1933a「樺太の旅Ⅰ・Ⅱ」『人類学雑誌』第48巻第3号：156-163，同5号：296-303
- 河野広道 1933b「北海道式薄手縄紋土器群」『北海道原始文化聚英』犀川会：16-21
- 河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4巻6号：114-122
- 新岡武彦・宇田川 洋 1992『サハリン南部の考古資料』北海道出版企画センター
- 大場利夫 1955「オホーツクの二つの文化圏－樺太ススヤ貝塚出土品を中心に－」『石器時代』第2号：46-54

種市幸生 1979「北海道考古学講座 8 オホーツク期」『北海道史研究』18: 36-56

Василевский, А.А. 1988a Неолитические памятники юго-восточного Сахалина. Проблемы сахалинского краеведения. Южно-Сахалинск. СОКМ.

Василевский, А.А. 1988b Отчёт об археологических раскопках поселений Предрефлянка и Южная в 1987 году. Научный отчёт. Хранение в Фондах ИА РАН. Р-1 №12503.

Василевский, А.А. 1995 Коррекция радиоугле родных датировок и абсолютная хронология археологических культур на острове Сахалин. Краеведческий бюллетень. Южно - Сахалинск. №2.с.93- 110.

Васильевский, Р.С. 1973 Древние Культуры Тихоокеанского Севера. Новосибирск.

Васильевский, Р.С., Голубев, В. А. 1976 Древ-

ие поселения на Сахалине - Сусуйская стоянка. Новосибирск.

Голубев, В.А. 1973 Археологические памятники Сахалинской области. Южно-Сахалинск.

Козырева, Р.В. 1967 Древний Сахалин. Ленинград.

Шубин, В.О. 1977 Локальный вариант охотской культуры на о. Сахалин. Дис. на соискание уч. ст. к. и.н. Новосибирск.

附表 サハリンにおける鈴谷文化と縄文文化の ^{14}C 年代測定値に見られる共通性 (BC 1 千年紀 - AD1 千年紀)

№ пп	Памятник, источник, предполагаемый возраст и культура, авторы сбора и обработки образца	шифр образца	первичная дата ВР	калибров-я дата AD/BC	Калибр. дата ВР
1	2	3	4	5	6
1.	Озёрск1, жил15, Шубин	МАГ 678	1600±100	495±105	1455±105
2.	Озёрск1, жил15, Шубин	МАГ 669	1590±200	460±200	1490±200
3.	Мыс Круглый, шурф, Горбунов	МАГ 675	1700±100	347±100	1603±100
4.	Шахтёрск1, обнажение, Шубин	СОАН 1024	1780±60	278±65	1672±65
5.	Озёрск1, жил15, Шубин	МАГ 679	1750±100	315±105	1635±105
6.	Кузнецов1, слой2, очаг Василевский, Голубев	ДВГУ 90	1640±340	350±330	1600±330
7.	Ивановка, раскоп 1, деревянный столб, Горбунов, Василевский	ТИГ 270	1850±90	158±86	1792±86
8.	Сусуя 1, раскоп, Васильевский	СОАН 1025	1850±150	197±193	1753±193
9.	Озёрск1, слой 0, 9м, Шубин	СОАН 1019	1920±55	84±48	1866±48
10	Озёрск1, слой1, 4м, Шубин	СОАН 1018	1910±65	77±57	1873±57
11	Таранай 1, шурф, Шубин	СОАН 1022	1970±45	50±38AD	1900±38

ДАТИРОВКИ ДО РОЖДЕСТВА ХРИСТОВА / ВС /

12.	Таранай 1, шурф, Шубин	СОАН 1021	2050±30	31±45	1981±45
13.	Сусуя 1, раскоп, Васильевский	СОАН 783	2040±65	26±78	1976±78
14.	Озёрск1, жил15, Шубин	МАГ 677	2070±100	112±157	2062±157
15.	Таранай 1, шурф, Шубин	СОАН10 23	2155±65	227±127	2145±127
16.	Стародубское 3, очаг между жилищами 99 и 100, нагар на керамике Эпи Дземон, Василевский, Кузьмин, Jull	АА 20865	2265±30	385±10 335±10	2335±10 2285±10
17.	Кузнецово1, слой 2, очаг, Василевский, Голубев	ДВГУ 91	2384±270	495±325	2445±325
18.	Сусуя 1, раскоп, Васильевский	СОАН78 2	2520±35	604±160	2554±160
19.	Свободное1, шурф, Шубин	МАГ 692	2700±200	762±310	2712±310
20.	Кузнецово1, слой2, очаг, Голубев	МАГ 693	2750±150	916±124	2866±124
21.	Южная 2, жилище 1, Василевский	Ле 4040	2360±110	565±190	2515±190
22.	Южная 2, жилище 1, Василевский	Ле 4039	2320±160	480±280	2430±280
23.	Усть-Айнское, нагар на керамике типа Сусуя с греб.оттиском (1993), Василевский, Кузьмин, Джалл	АА 36621	2540±45	775±20	2725±20
24.	Усть-Айнское, очаг из жилища с керамикой типа Сусуя с гребенч.оттиском (1993), Василевский, Цудзи	Beta 110665 - (RH- AYN- 101)	2550±110	603±222	2553±222
25.	Усть-Айнское. Уголек из черного слоя (black band), который появился на дюнах после прихода людей) - - tcal .	Beta 110666 (RH- AYN 106	2340±60	305±110	2255±110
26.	Южная 2, жилище 1, Василевский	Ле 4038	2550±160	650±180	2600±180
27.	Южная 2, жилище 1, Василевский	Ле 4041	2450±100	595±195	2545±195
28.	Предрефлянка, жилище 1, нагар на керамике с шнуровым оттиском и жемчужинами Василевский, Кузьмин	АА2313 1	2800±45	950±45	2900±45
29.	Предрефлянка, жилище 1, нагар на керамике с шнуровым оттиском и жемчужинами Василевский, Кузьмин	АА 25440	2740±45	875±40	2825±40